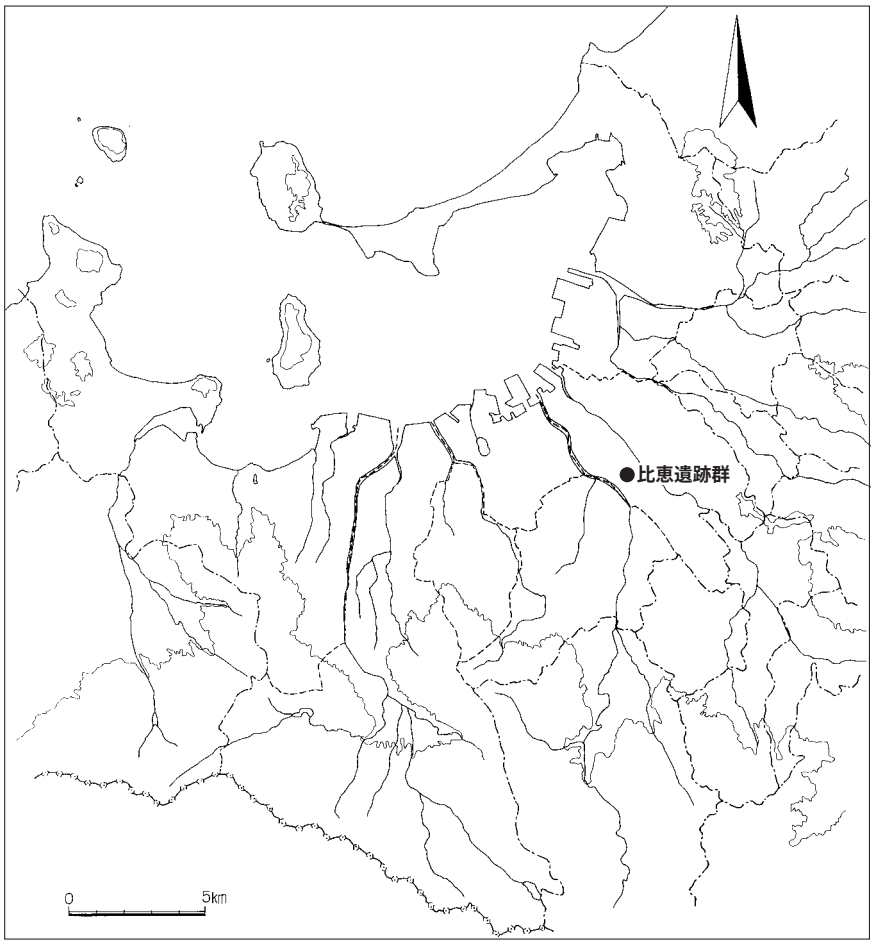
福岡市埋蔵文化財調査報告書第856集

比　恵　39

－比恵遺跡群第85次調査報告－

２００５

福 岡 市 教 育 委 員 会



遺跡略号　HIE-85
遺跡調査番号　0321

巻頭写真１　ＳＤ001・ＳＸ005土層

巻頭写真２　ＳＸ007土層

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する比恵遺跡群第85次調査においても、発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、株式会社見上をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成17年３月31日
福岡市教育委員会
教育長　　植木　とみ子

例　　言

１．本書は福岡市教育委員会が平成15年度に博多区博多駅南３丁目58番において実施した比恵遺跡群第85次調査の発掘調査報告書である。
２．遺構の実測は長家伸、坂本真一（現福岡県教育委員会）が行った。
３．遺物の実測は長家、林田憲三が行った。
４．製図は長家が行った。
５．写真は長家が撮影した。
６．本書で用いる方位は磁北であり、座標北から６°西偏し、真北から６°18′西偏する。なお座標は日本測地系を使用している。
７．本書で用いる遺構番号は通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は竪穴住居跡（ＳＣ）、貯蔵穴（ＳＵ）、溝（ＳＤ）、ピット（ＳＰ）である。
８．本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
９．本書の編集・執筆は長家が行った。

遺跡調査番号	０３２１	遺跡略号	ＨＩＥ－８５		
所 在 地	博多区博多駅南３丁目58番			分布地図番号	37－0128
開発面積	990.88㎡	調査対象面積	480㎡	調 査 面 積	290㎡
調査期間	平成15年６月４日～平成15年７月31日			事前審査番号	14－２－507

本文目次

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査にいたる経過……1
　2　調査体制……1
Ⅱ　調査の記録……5
　1　調査概要……5
　2　遺構と遺物……7
　1）竪穴住居跡……7
　2）貯蔵穴……8
　3）土坑……8
　4）溝および関連遺構……10
　5）包含層出土遺物……17
　6）小結……20

挿図目次

第1図　調査区位置図1（1/50,000）……2
第2図　調査区位置図2（1/5,000）……3
第3図　調査区位置図3（1/500）……4
第4図　調査区配置図（1/300）……5
第5図　調査区全体図（1/150）……6
第6図　ＳＣ012及び出土遺物実測図（1/40、1/3）……7
第7図　ＳＵ011及び出土遺物実測図（1/30、1/3）……8
第8図　ＳＫ003及び出土遺物実測図（1/50、1/3）……9
第9図　調査区西壁土層（1/50）……折り込み
第10図　ＳＤ001Ｂ区内杭列及びＳＤ001出土遺物実測図1（1/60、1/3）……11
第11図　ＳＤ001出土遺物実測図2（1/3）…12
第12図　ＳＤ004東西土層及び出土遺物実測図（1/50、1/3）……13
第13図　ＳＸ005及び出土遺物実測図（1/60、1/3）……14
第14図　ＳＸ007実測図（1/60）……15
第15図　ＳＸ007出土遺物実測図1（1/3）…16
第16図　ＳＸ007出土遺物実測図2（1/3）…17
第17図　包含層出土遺物実測図1（1/3）……18
第18図　包含層出土遺物実測図2（1/3）……19

写真目次

巻頭写真1　ＳＤ001・ＳＸ005土層
巻頭写真2　ＳＸ007土層
写真1　ＳＤ001・ＳＫ003（東から）……20
写真2　丘陵部Ｆ区全景（南から）……21
写真3　ＳＣ012・ＳＵ011（東から）……21
写真4　ＳＵ011（東から）……22
写真5　ＳＵ011内遺物出土状況（東から）…22
写真6　ＳＫ003（北から）……22
写真7　ＳＫ003（東から）……22
写真8　ＳＫ003北壁土層 ……22
写真9　調査区西壁土層（合成写真）……折り込み
写真10　ＳＤ001北壁土層 ……折り込み
写真11　ＳＤ001Ｂ区内杭列（東から）……折り込み
写真12　ＳＤ001南端完掘状況（南東から）……折り込み
写真13　ＳＤ001南端・ＳＸ005（東から）……折り込み
写真14　ＳＤ004（北西から）……23
写真15　ＳＤ004及び包含層東西土層 ……23
写真16　ＳＸ005（西から）……23
写真17　ＳＸ005土層 ……23
写真18　ＳＸ007木材出土状況（北西から）…23
写真19　ＳＸ007木材出土状況（北東から）…23
写真20　ＳＸ007上部木材除去後（東から）…24
写真21　ＳＸ007土層 ……24
写真22　Ｄ区包含層除去後、丘陵傾斜状況（北西から）……24
写真23　Ｄ区包含層除去後（北から）……24

Ⅰ　は　じ　め　に

１　調査にいたる経過

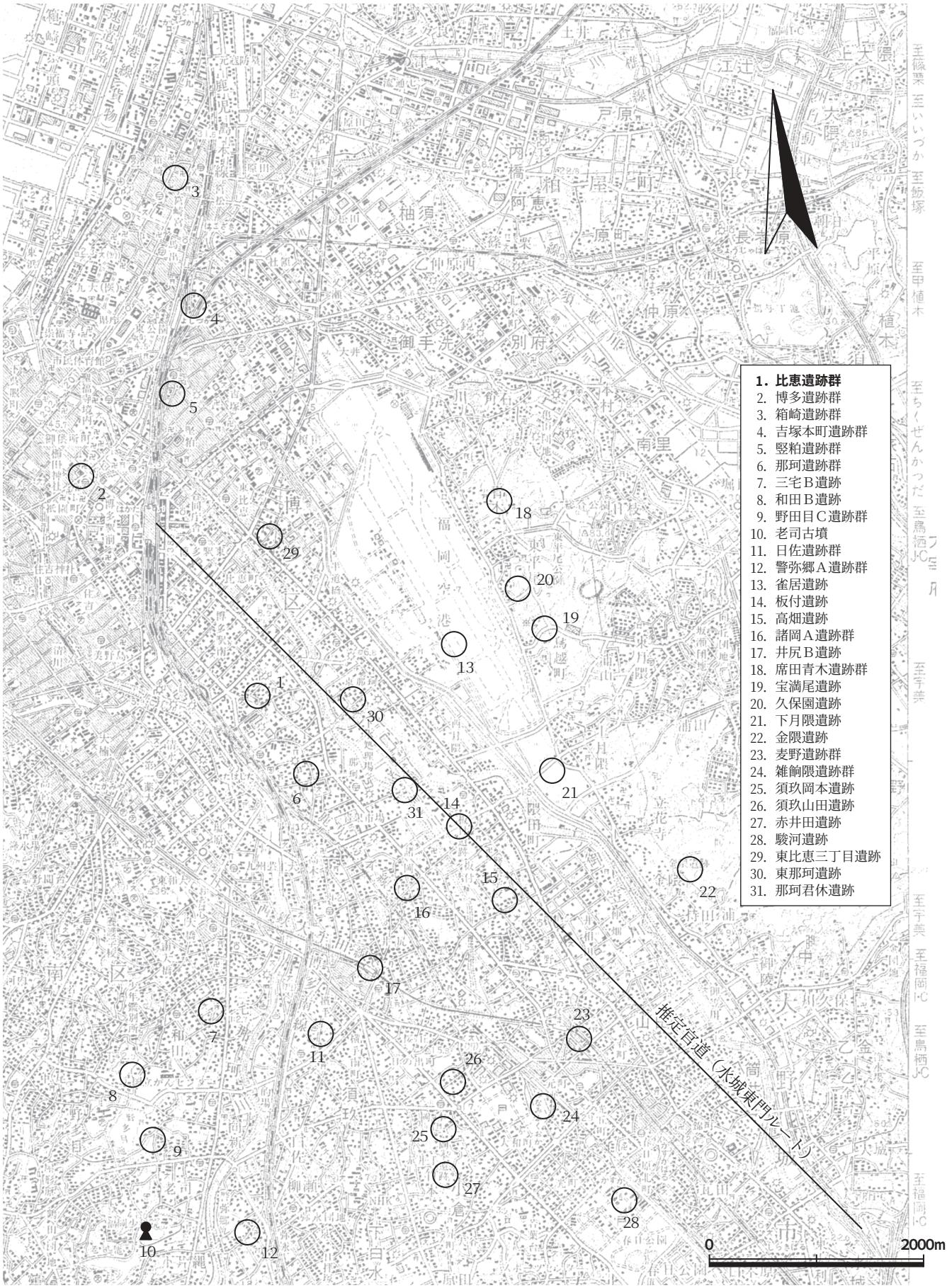
平成14年10月21日付けで株式会社見上　代表取締役井川英治氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区博多駅南３丁目58番の物件に関して、共同住宅建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号14－２－507）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群（分布地図番号37－0128・遺跡略号ＨＩＥ）に含まれている地点である。申請地は平成元年度（1989年度）に当時計画された建物範囲について第26次調査が行われた地点であり、その成果は「福岡市教育委員会1991『比恵遺跡群』(10)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集」として報告されている。このため埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、第26次調査で現状保存とした区域について調査対象として、平成15年度に発掘調査、平成16年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。

調査期間は平成15年６月４日～平成15年7月31日である（調査番号0321）。調査面積は290㎡、遺物はコンテナ30箱分出土している。

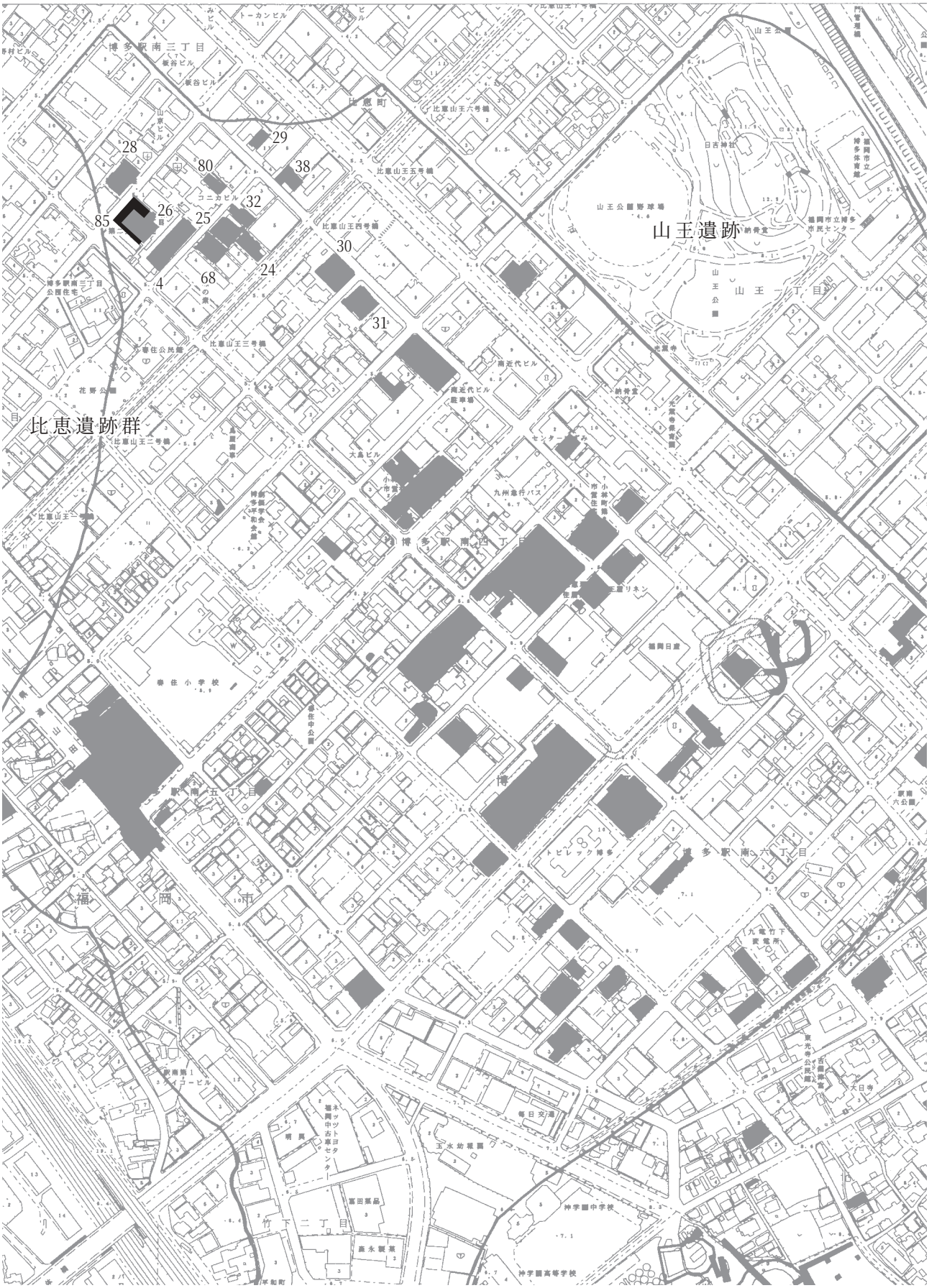
現地での発掘調査にあたっては株式会社見上の皆様からご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

２　調査体制

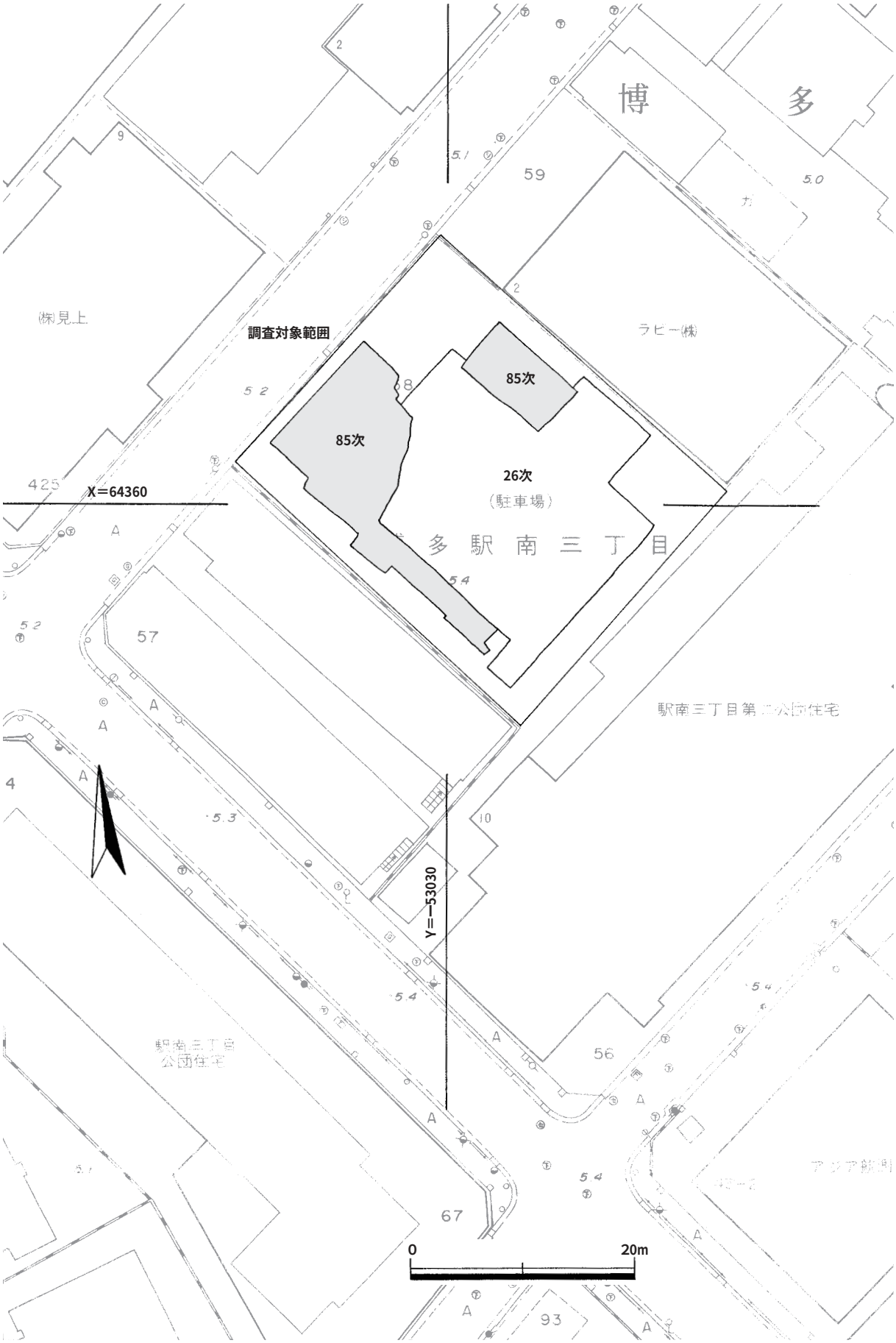
事業主体　株式会社見上
調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文課財課長　　山崎純男（前任）　山口譲治（現任）
　　調査第２係長　　田中壽夫（前任）　池崎譲二（現任）
調査庶務　文化財整備課　御手洗清
調査担当　調査第２係　長家伸
調査作業　澄川アキヨ　中村フミ子　岩本三重子　越智信孝　藤野トシ子　中村サツエ
　　藤野幾志　西川シズ子　宮崎幸子　桒野孝子　中島道夫　坂本真一



第１図　調査区位置図１（1/50,000）



第２図　調査区位置図２（1/5,000）



第３図　調査区位置図３（1/500）

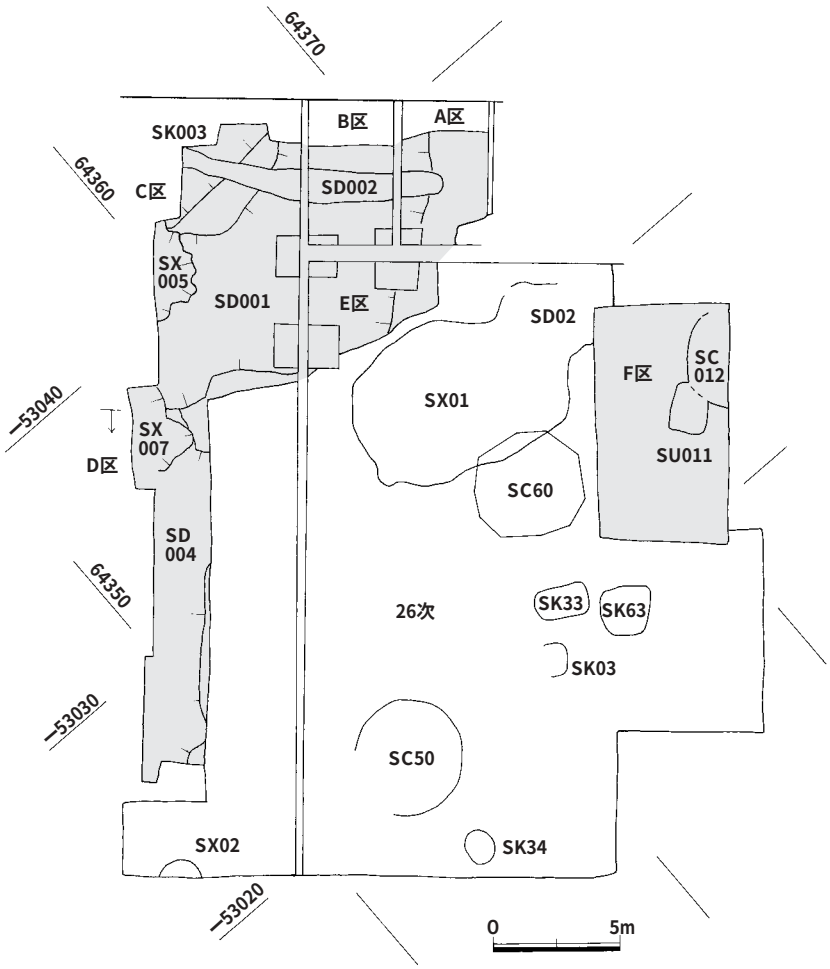
Ⅱ　調　査　の　記　録

1　調査概要

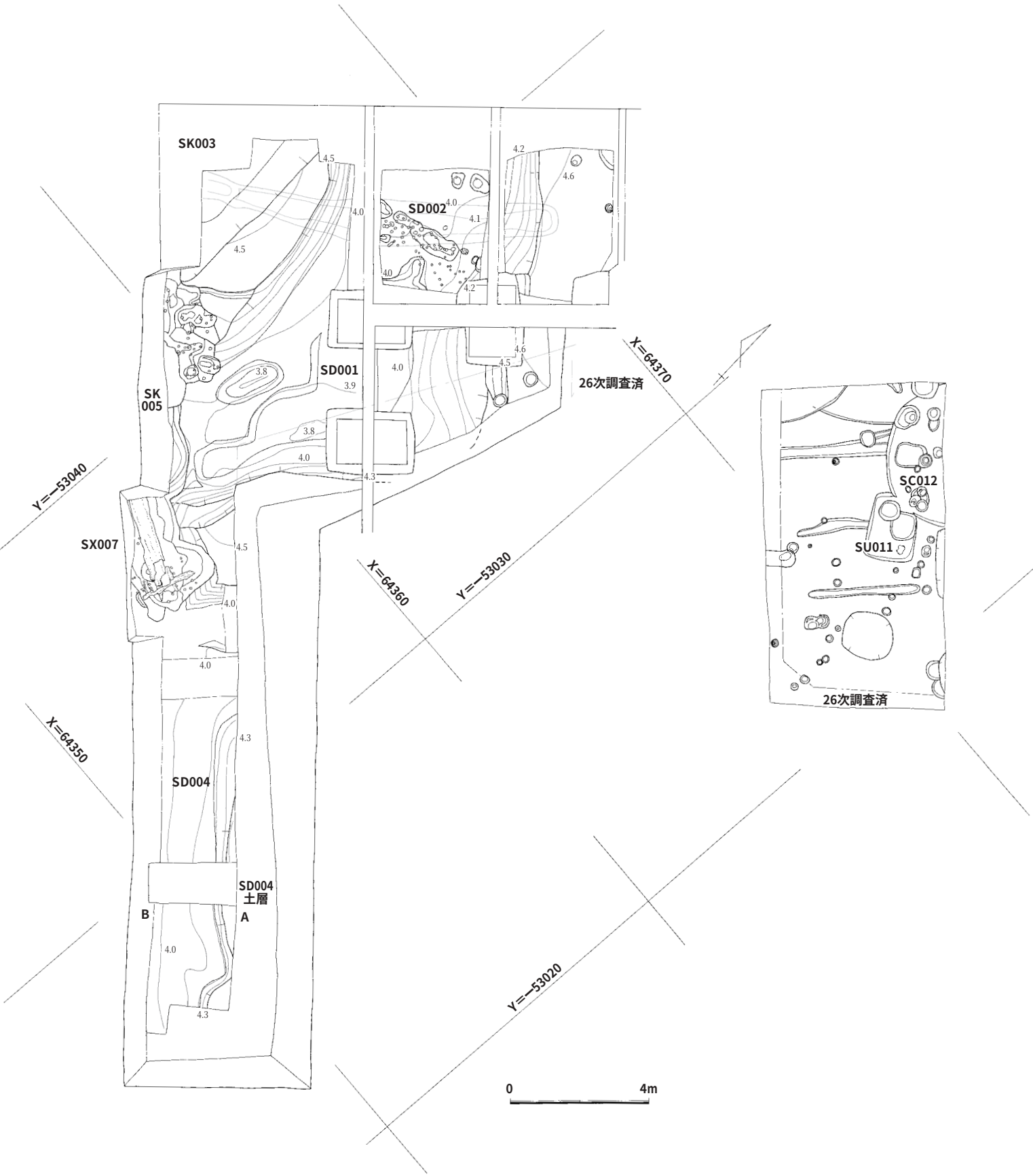
比恵遺跡群は福岡平野の中央部分を北流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地する遺跡群である。丘陵の基盤層は花崗岩礫層で、この上面に阿蘇噴火火砕流・火山灰である八女粘土層・鳥栖ローム層・新期ローム層が堆積している。南側に隣接する那珂遺跡群とは一連の丘陵上の遺跡群を構成するものと考えられ、その範囲はあわせて南北2.4㎞、東西１㎞に及ぶと考えられ、今回の対象地はこの丘陵の北側先端部分にあたる。

周辺の調査成果については既刊報告書にあたっていただき、ここでは同一敷地内で行われた前回第26次調査について概要を述べておきたい。第26次調査は申請地の中央部分400㎡を対象として調査を行っている。この調査では丘陵上の遺構及び西側の丘陵落ち際に堆積した包含層の調査が行われている。丘陵上は後世の削平が進行していたが、弥生時代前期の竪穴住居跡２棟、貯蔵穴３基、溝４条、土坑１基、ピット、弥生時代終末以降の水溜め状遺構１基、中世の溝１条がそれぞれ確認されている。また包含層中からは弥生時代前期後半～中期初頭の土器と共に、石器、木製品、銅鏃等が出土している。また包含層を掘り込んでいる木器貯蔵施設状の浅い土坑が確認でき、ここでは竪杵が石材で押さえられた状態で出土している。ほかに角材等の出土も見られる。この調査により、丘陵先端部分に弥生時代前期を中心とした遺構の広がりが判明し、また丘陵落ち際の確認によりそれまでの想定よりも更に北側に丘陵が伸びることも確認できた。

今回調査対象となったのは前回の調査時点で残地となった申請地の外周部分を中心とする範囲であ



第４図　調査区配置図（1/300）



第５図　調査区全体図（1/150）

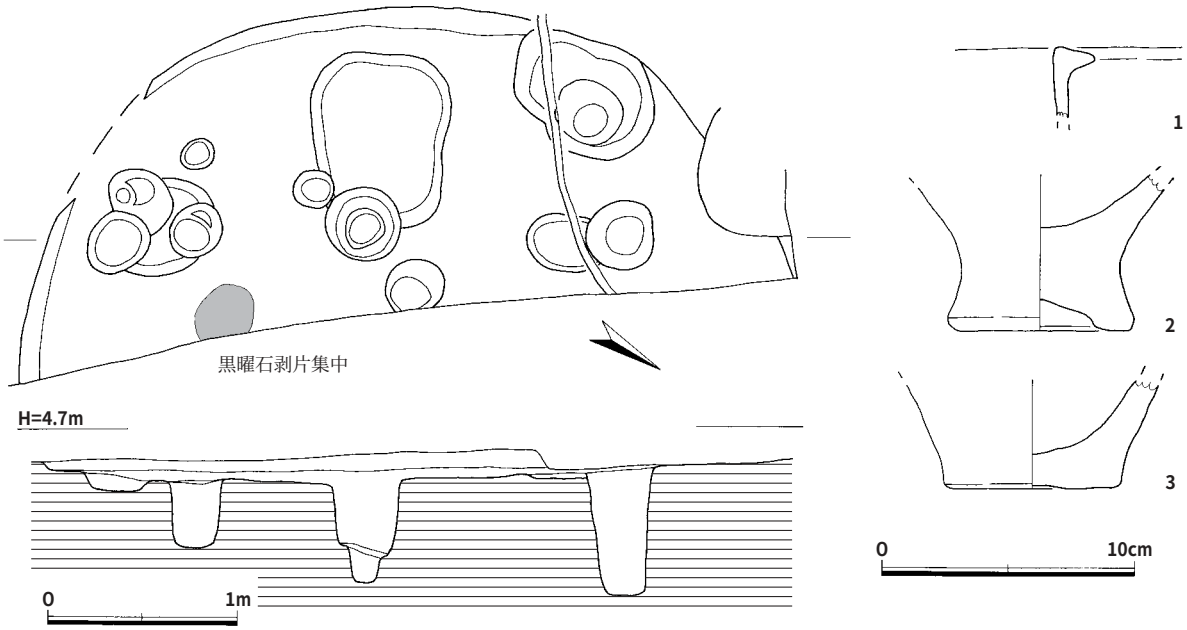
る。調査は重機による表土除去の後、人力による掘削作業を行っている。なお既設倉庫のコンクリート基礎が残っていたため、これを利用して便宜的に調査区内をＡ～Ｆ区に分けて呼称している。対象地は調査前には駐車場として利用されており現況標高5.5～5.7ｍである。盛土・旧水田土を１ｍ厚程度除去した標高4.6ｍ前後が遺構面であるが、水田化による削平により丘陵部分での遺構面は全体でほぼ平坦となっている。この時点でＦ区、Ａ・Ｅ区東側、Ｃ区中央部にそれぞれ丘陵部分が確認できた。またＤ区には第26次調査で確認された丘陵落ち際の包含層が続いている。今回の調査では当初は谷部にあたると考えられたＣ区に丘陵が伸びていること、丘陵縁辺に溝（ＳＤ001）が掘削されていることなどが注目される。調査区全体の遺構・遺物の多くは弥生時代前期～中期に位置付けられるもので、当時の台地縁辺部分の土地利用状況についての知見を与えるものである。検出遺構は弥生時代前期前半～中期中頃が主体となり、なかでも前期後半～中期初頭の遺物が多くを占めている。主な遺構は竪穴住居１棟（ＳＣ012)、貯蔵穴１基（ＳＵ011)、溝２条（ＳＤ001・004）及びこれに関連する遺構２基（ＳＸ005・007)、大型土坑（ＳＫ003)、丘陵縁辺に形成された包含層、中世以降の溝１条（ＳＤ002）等がある。

２　遺構と遺物

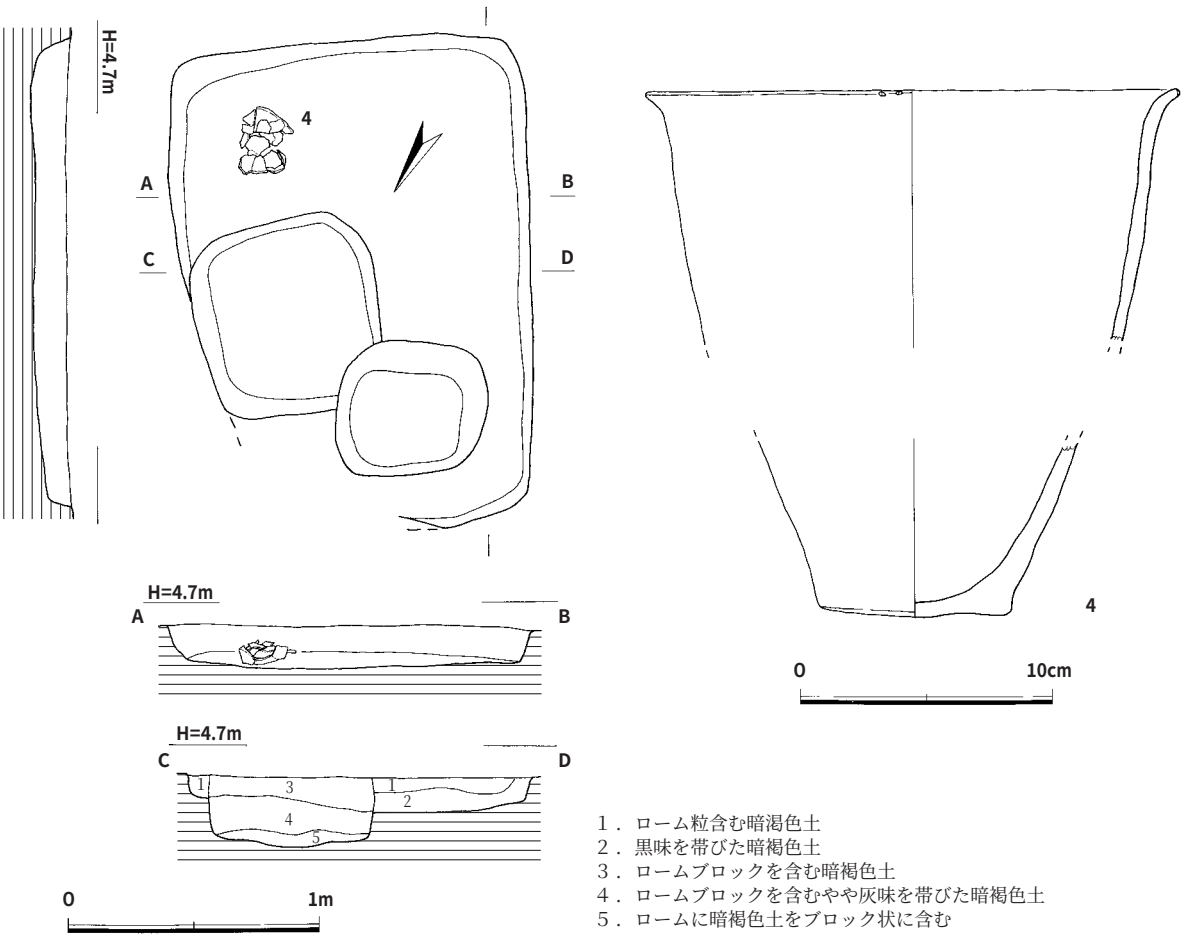
１）竪穴住居跡

ＳＣ012（第６図）

Ｆ区で検出する。径４ｍ程度の円形住居跡と考えられる。壁高は10㎝弱で、埋土は暗褐色を呈する。主柱等の施設は明確ではない。南東側床面上から黒曜石剥片がまとまって出土している。第26次調査でも同規模の竪穴住居跡ＳＣ－50が確認されている。松菊里型の住居跡で、埋土から多量の黒曜石が出土している。黒曜石剥片のほか弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる摩滅した小破片が出土しており、第26次調査で確認された住居跡（ＳＣ－50・60）とは時期を異にしているようである。



第６図　ＳＣ012及び出土遺物実測図（1/40、1/3）



第７図　ＳＵ011及び出土遺物実測図（1/30、1/3）

出土遺物（第６図）

１は口縁部に粘土帯を貼り付けて嘴状に作る甕の口縁部である。２は厚い上げ底の底部である。外面橙色、内面淡い黒色を呈する。３は平底の底部である。内外面淡い橙色を呈する。

２）貯蔵穴

ＳＵ011（第７図）

Ｆ区で検出する。長軸２ｍ、短軸1.5ｍを測り、平面長方形を呈する。壁高10～15㎝を測り、ほぼ直立している。床面は中央に向かって緩やかに深くなるが、凹凸は見られない。床面上から甕が１個体出土している。第26次調査でもこの西側で、平面方形～長方形の貯蔵穴が３基確認されている。弥生時代前期前半に位置付けられる。

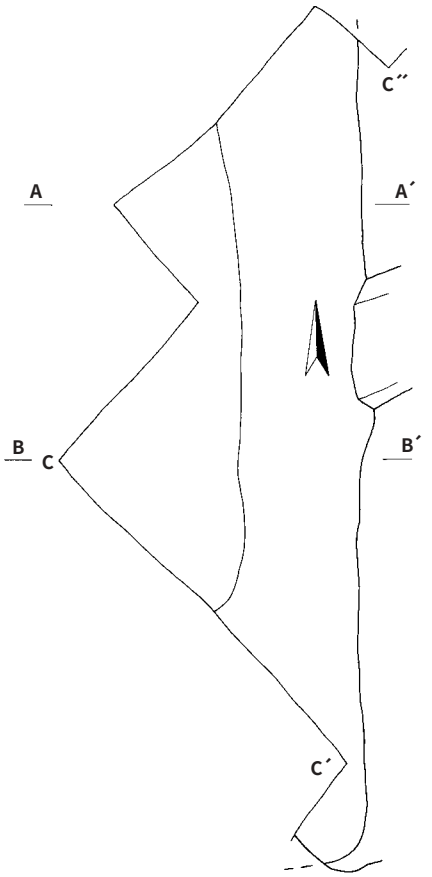
出土遺物（第７図）

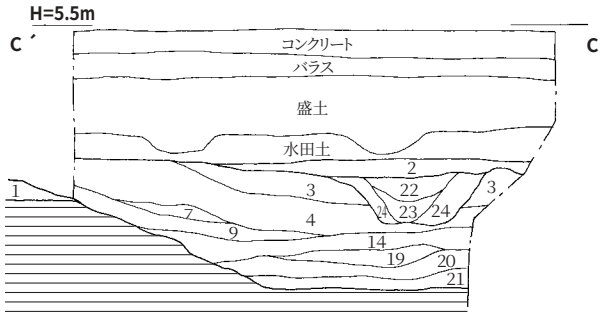
４は床面東隅から出土した甕である。本来完形になるものであるが、細片化しており復元的な作図となっている。如意形口縁の甕で、胴部の張りは無く平底の底部に至る。器面内外面全体が２次的な被熱によりにぶい橙色化している。また摩滅により調整は不明である。

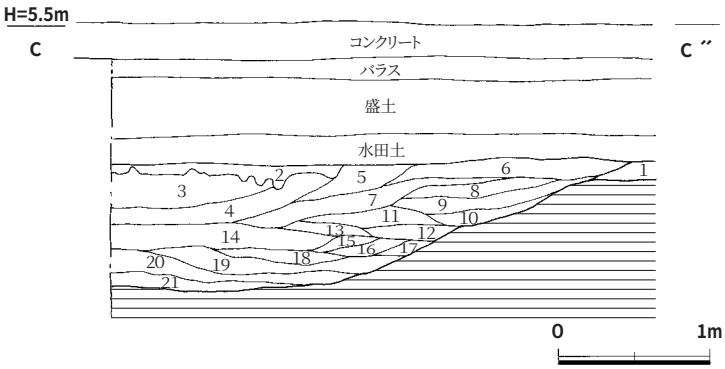
３）土坑

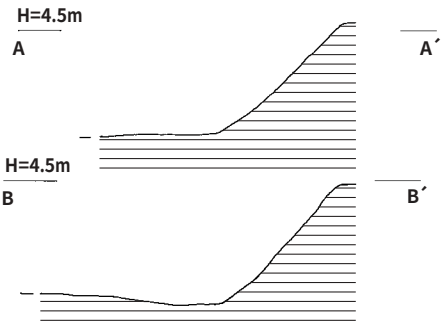
ＳＫ003（第８図）

調査区西側隅Ｃ区で確認する。本来この部分は丘陵斜面にあたる部分と考えていたが、調査の結果



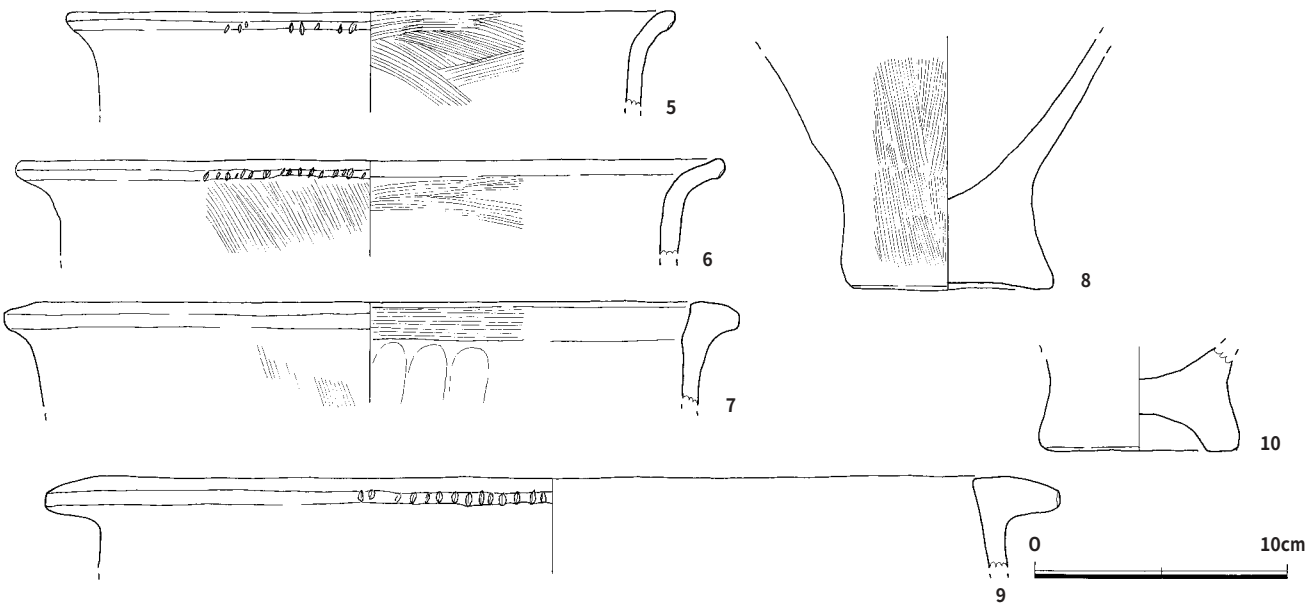






1. 鳥栖ロームブロックを含む暗褐色土（包含層）
2. 粗砂（水田痕跡）
3. 青灰色シルト
4. 鳥栖ロームに暗褐色土を少量混合
5. 4層にほぼ同じ
6. 4層に似るがブロックをほとんど含まない
7. 暗褐色土に鳥栖ロームブロック混合
8. 青灰色シルトと鳥栖ロームブロック混合（2:1）
9. 青灰色シルト
10. 8層に同じ
11. 9層に同じ
12. 8層に同じ
13. 砂層
14. 砂層
15. 灰色粘質土
16. 砂層
17. 砂層に暗褐色土を少量含む
18. 粗砂
19. 灰色細砂
20. 黒色土（ロームブロックを少量含む）
21. 鳥栖ロームに黒色土を少量混合する
22. 灰色砂質土
23. 灰色土
24. 粗砂を多く含む灰色砂質土

3～21層がSK003埋土、22～24はSD002埋土



第８図　ＳＫ003及び出土遺物実測図（1/50、1/3）

丘陵が西側に張り出すことが確認できた。遺構は大半が調査区外にかかるため、形状・規模の詳細は明らかでないが、均整の取れた（長）方形掘り方の大型土坑と考えられる。北側にコーナーの一部を検出し、現状でも北に5.5ｍを確認している。断面は浅皿状を呈し、底面は比較的平坦である。埋土は大きく３層に分けることができる。最下層（20層・21層）は湿地状態の自然堆積土である。その上層（８層～19層）は流動性が見られない粗砂主体土（13層～19層）とシルト主体の８層～12層に分けることができる水成層である。最上層（３層～７層）はロームを多く含む埋め立て土と考えられる。機能は不明であるが第26次調査検出のＳＸ－01と規模・形状・土層堆積状況が類似している。これは溜池状の遺構と考えられており、ＳＫ003もこれに類する遺構の可能性が考えられる。本遺構は丘陵上に堆積した暗褐色土包含層（１層）を切って掘削されており、ＳＸ005に切られている。中期初頭～前半代の掘削であろうか。

出土遺物（第８図）

５～８はＳＫ003出土、９・10は暗褐色包含層出土である。５・６は如意形の甕口縁部である。口縁端部下端に刻み目を施している。５の内面・６の内外面に刷毛目が認められる。７は端部外面に粘土帯を貼り付け断面嘴状に作っている。内面上端部に横刷毛を行い、以下は指押さえによる調整を行う。８は粘土充填により厚手に作る底部で、僅かに上げ底となる。内面には煤が付着する。また外面は縦刷毛を行っており、断続的に小口痕が認められる。９は鋤状口縁である。端面に刻み目を施している。10は上げ底の底部である。

４）溝及び関連遺構

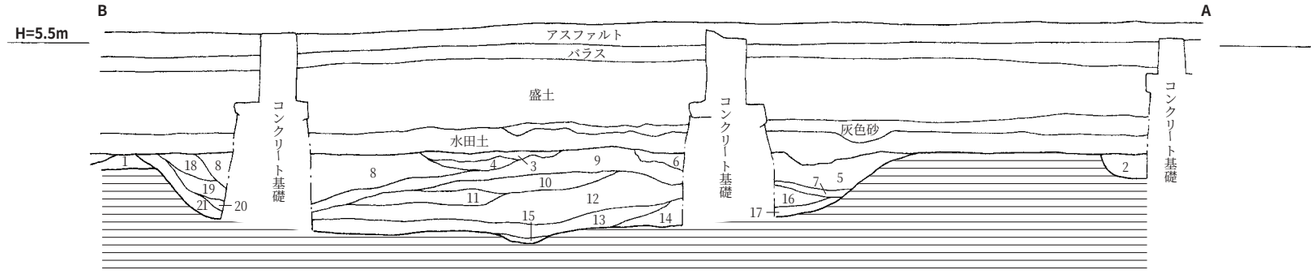
ＳＤ001（第９・10図）

調査区北西側で確認した溝である。溝幅約６ｍ、検出面からの深さ60㎝前後を測り、横断面は比較的均整の取れた逆台形を呈する。調査区内で矩形に折れ曲がり、底面レベルは北から南側に向けて緩やかに傾斜していることから、西側丘陵斜面部分に向かって流水が流れ込むように掘削されているようである。また西端部土層際では低地部に向かって急激に落ち込んでいるようであり、激しい湧水（標高2.8ｍ）のため掘りきることができなかった。埋土は粗砂を主体とするもので、これにシルトが互層状に堆積している。またＢ区において溝掘削方向に直行する東西方向に直線的に伸びる杭列を確認している。確認できたのは縦杭のみで、それも木質の遺存状態は不良であった。多数の杭痕跡は木質の大半が失われ、その痕跡部分に粗砂が入り込んだものとなっている。そのため第10図に掲載の断面図においても、杭形状については復元的な作図を行っている。周辺遺構との先後関係は西側土層からＳＸ005に切られていることが確認できる。またＳＫ003同様に丘陵上に形成された包含層（第９図１層）を切って掘削されている。出土遺物はやや新出の遺物も含んでいるが、中期中頃を前後する遺物が主体となっており、この時期の埋没であろうと考えられる。

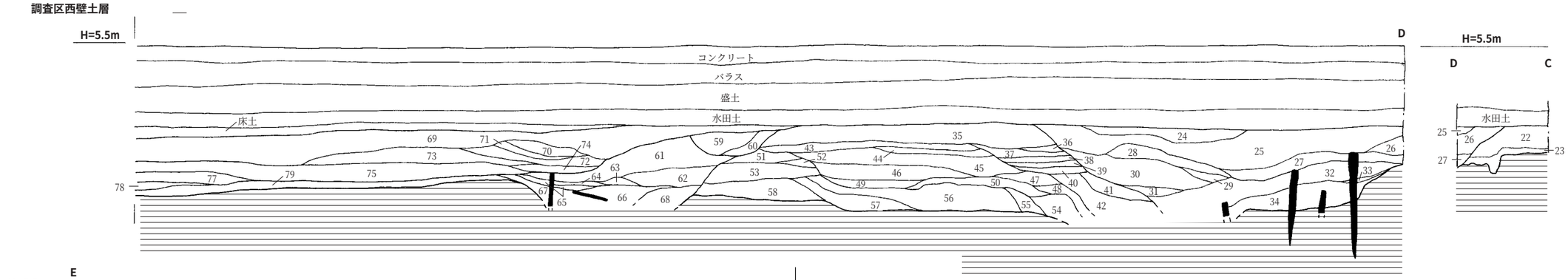
出土遺物（第10・11図）

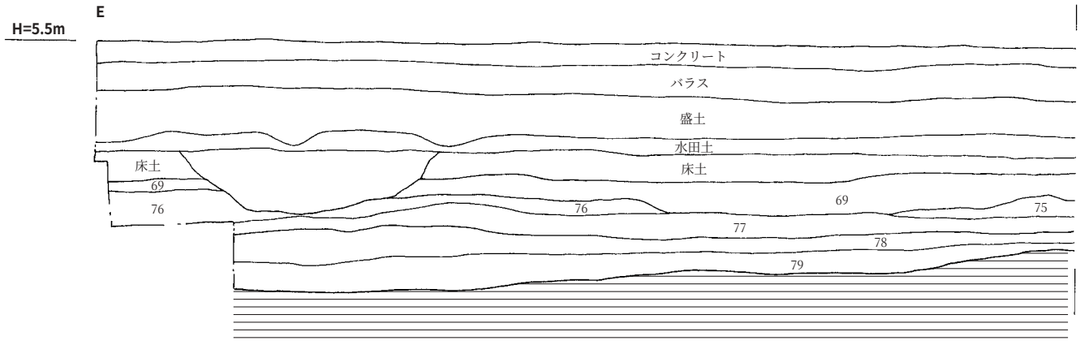
11は逆Ｌ字状口縁部を有する甕の口縁部である。剥落が進んでいるが、残存部内外面に赤色顔料が塗布されているようである。12は口縁下端部に刻みが認められ、頸部には沈線が１条施される。13～15は断面鋤状を呈する甕の口縁部である。内面への突出度合いは15が最も顕著である。上面端はいずれもほぼ水平となっている。調整は内外面ナデにより、15には外面に断面三角形の突帯が貼付されている。16～18はやや厚手の底部破片である。16は平底、17・18は僅かに上げ底気味となる。調整はいずれも内面には指ナデの痕跡が残っている。外面は17・18が縦刷毛、16はヘラ状工具による縦方向のナデによるものである。19は丹塗りの広口壺口縁部である。内面に横方向の刷毛目が残されている。20は口縁部に２個１対の焼成前穿孔を有する壺である。外面には丹塗りを行い、横方向の磨きが認め

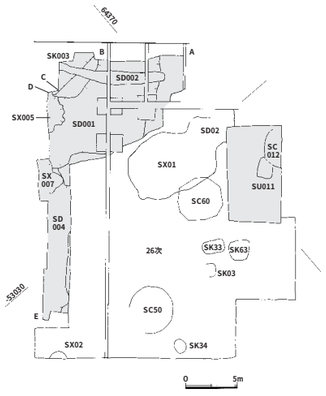
SD001北壁土層



調査区西壁土層



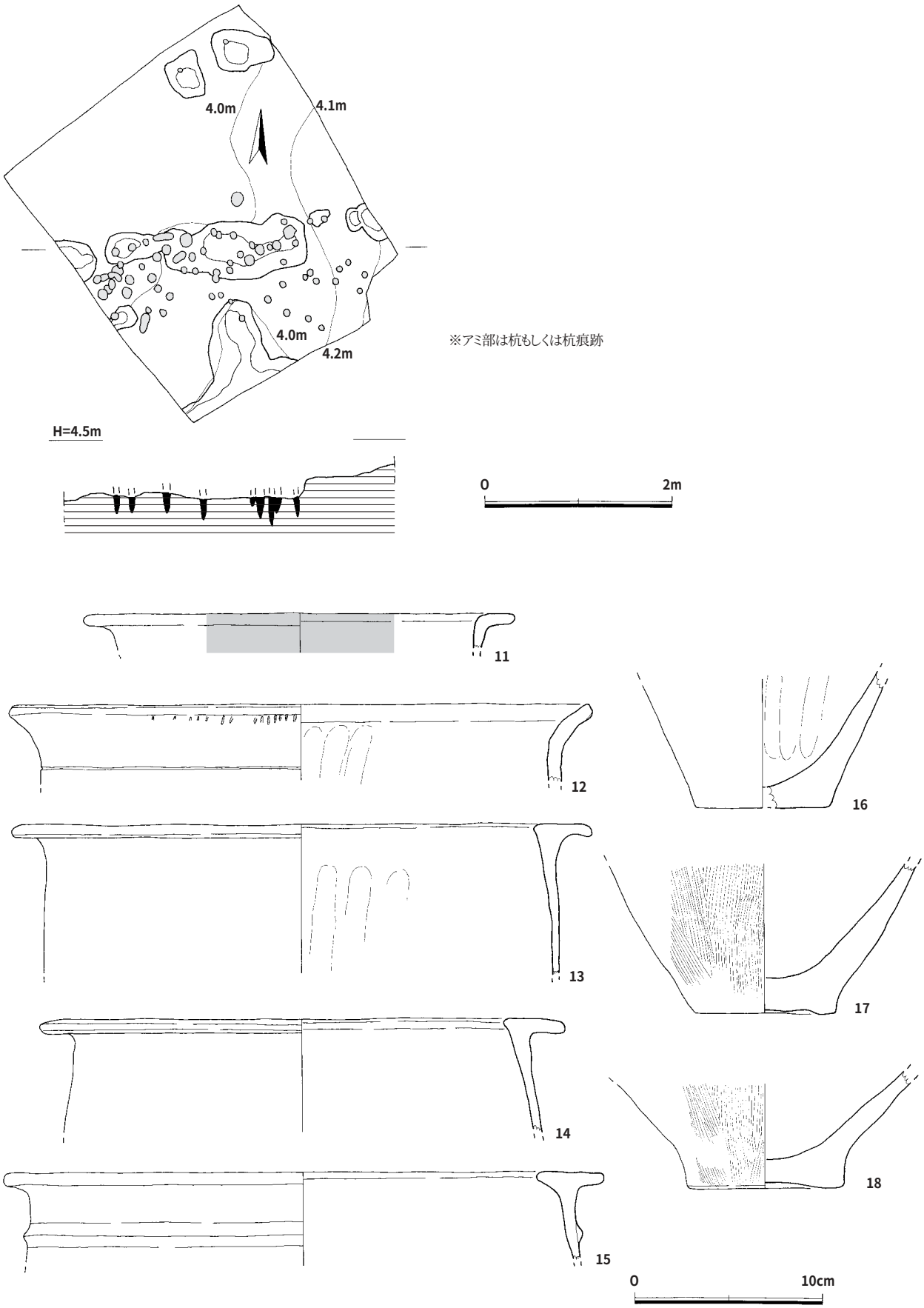




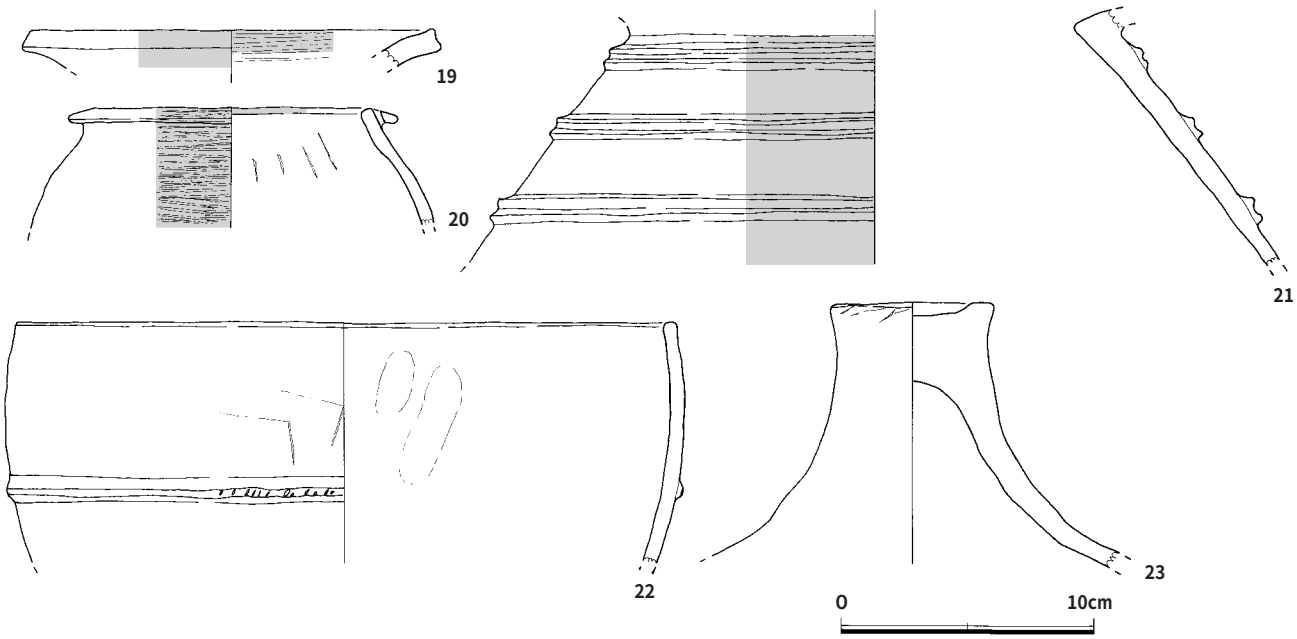
1. 暗褐色土包含層（第8図1層に対応）
2. 暗褐色土（ピット埋土）
3. 灰白色粘質土
4. 粗砂
5. 粗砂
6. 灰白色砂質土
7. 灰白色シルト
8. 砂層
9. 砂層～褐色シルト
10. 粗砂
11. 砂層～シルト
12. 16層に同じ
13. 灰色シルト
14. 砂～粗砂
15. 灰褐色粘質土
16. 粗砂
17. 灰色シルト
18. 灰褐色シルトと鳥栖ロームブロック混合
19. 灰褐色シルト
20. 黒褐色土（粘性が強い）
21. 青灰色シルト（きめが細かい）
22. 青灰色シルト
23. 鳥栖ロームに暗褐色土少量混合
24. 粗砂を多く含む褐色粘質土
25. 褐色粘質土
26. 灰味を帯びた暗褐色土
27. 灰褐色土
28. 白色砂
29. 灰褐色土
30. 白色砂
31. 暗灰色土
32. 灰色砂と白色砂の互層
33. 暗灰色土
34. 粗砂
35. 褐色砂
36. 茶褐色砂
37. 灰白色細砂
38. 粗砂
39. 粗砂
40. 灰白色細砂
41. 粗砂
42. 粗砂
43. 茶褐色粗砂
44. 白色砂
45. 粗砂
46. 灰色土に白色砂がラミナ状に入る
47. 白色砂
48. 砂と灰色シルト互層
49. 粗砂
50. 砂層に黒色土がブロック状に混入
51. 褐色砂質土
52. 茶褐色砂
53. 暗褐色土とロームの混合土
54. 黒色土
55. 黒色土に粗砂が入る
56. ローム粒を含む黒灰色
57. 56層より灰味が強い
58. 79層に同じ
59. 粗砂
60. 青灰色シルト
61. 暗褐色土
62. 粗砂
63. 灰色粘質土
64. 粗砂
65. 粗砂にシルトがラミナ状に入る
66. 粗砂
67. 砂層
68. 黒灰色粘質土（木質を多く含む）
69. 青灰色シルト（きめが細かい）
70. 粗砂
71. 青灰色シルト
72. 粗砂
73. 青灰色シルトに砂が部分的に入り込む
74. 粗砂（シルトがラミナ状に入る）
75. 青灰色シルトと粗砂が厚さ3cm程で互層状になる
76. 69層がやや暗くなり暗褐色化する
77. 暗褐色シルト（土器を多く含む）
78. 青灰色粘質土（グライ化）
79. 黒色土

22･23層はSK003埋土
24～34層はSX005埋土
35～57層はSD001埋土
61～68層はSX007埋土
69～77層はSD004埋土
58･78･79層は自然堆積層

第９図　調査区西壁土層（1/50）



第10図　ＳＤ001Ｂ区内杭列及びＳＤ001出土遺物実測図１（1/60、1/3）



第11図　ＳＤ001出土遺物実測図２（1/3）

られる。内面は上部に連続した小口痕跡が残っているが、中位以下は横方向のナデである。21も顔料は剥落しているが、丹塗り壺の上半部である。逆Ｌ字状口縁部は欠失している。また３条の断面M字状突帯が貼り付けられている。22は口縁部を四角く面取りしている鉢である。胴部はやや膨らみ、中ほどに断面三角形の突帯を貼り付け、そこに刻み目を施している。内面にはナデによる指頭痕が残り、外面はヘラ状工具による横ナデが行われる。23は蓋である。摩滅が進み調整は不明瞭となる。

ＳＤ002（第５図）

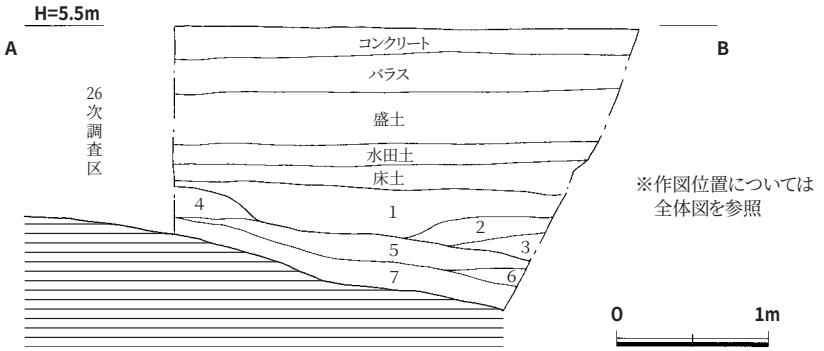
調査区北端部Ａ～Ｃ区で確認する。ＳＤ001・ＳＫ003埋没後に掘削された溝である。幅70～130㎝、検出面からの深さ20～30㎝、断面浅皿状～逆台形を呈する。Ａ区で立ち上がるが、本来は更に東に延びるものと考えられる。埋土は（第８図22～24層）灰色土を主体とし、粗砂を多く含んでいる。出土遺物は僅少であり時期詳細は不明であるが、埋土の特徴から考えて、中世以降の掘削と考えておきたい。

ＳＤ004（第12図）

調査区西端で確認する。丘陵斜面に沿って堆積する粗砂・シルトを主体とした水成堆積部分を縁辺の流水痕跡としてＳＤ004として遺物を取り上げた。溝としての規模・形状は明らかでないが、第14図土層Ａ－Ｃ断面から西側の立ち上がりが想定でき、これによればおおよそ幅２～３ｍを測り、断面浅皿状を呈する溝状遺構となる。時期的には斜面上に形成された包含層（第12図４～７層）を切って埋土が堆積すると共に、ＳＸ007に後出するものと考えられる。弥生時代中期初頭～中期前半のものと考えられる。

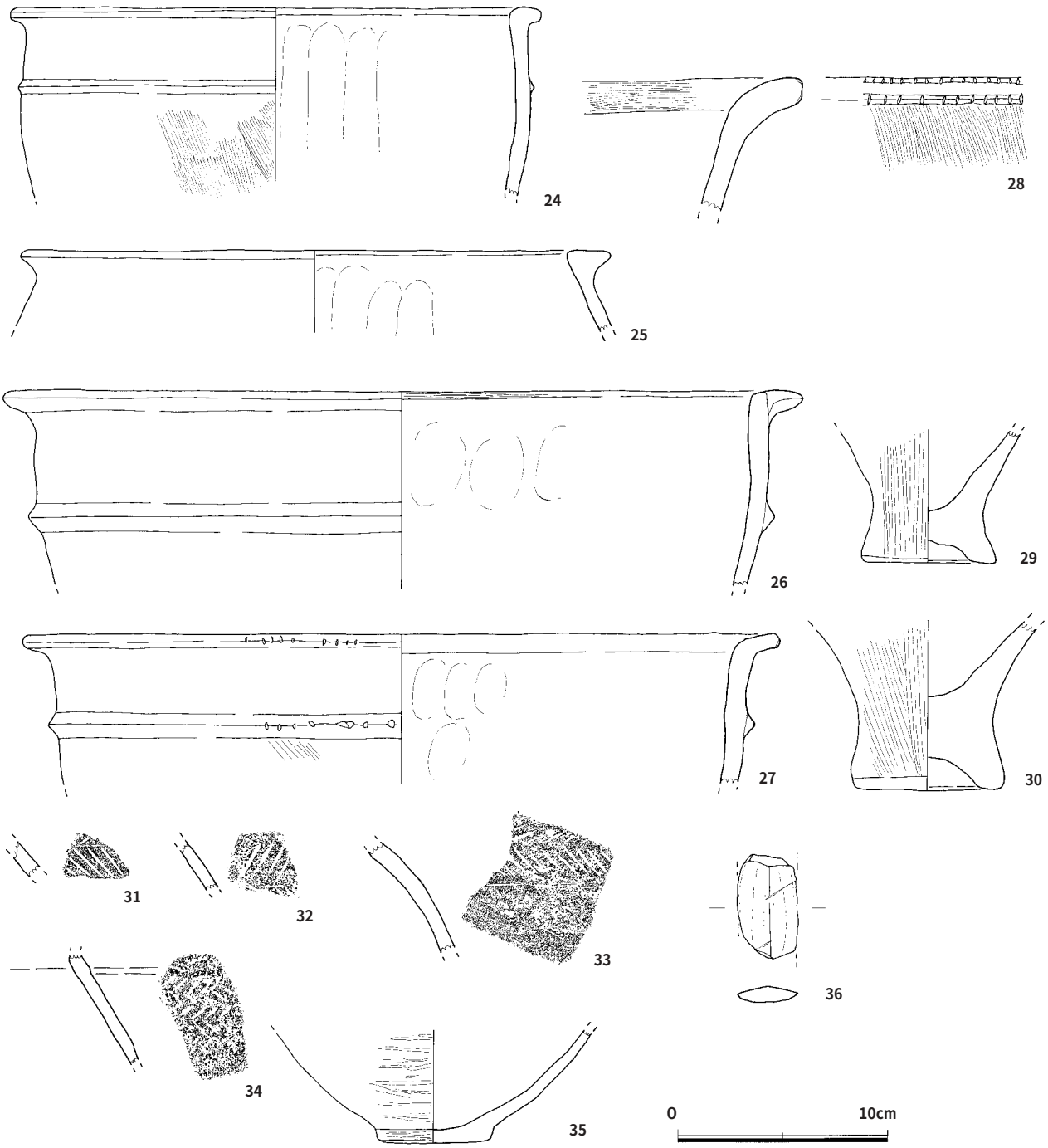
出土遺物（第12図）

24～26は口縁端部が外側に短く嘴状に張り出す甕である。内面にはいずれも指ナデの痕跡が残る。24・26には胴部に断面三角形の突帯を貼り付け、24は突帯下に縦刷毛が認められる。27は如意形の口縁部に刻み目を有する突帯を貼り付けたものである。口縁部端面にも刻みを行う。内面指ナデ、外面には突帯下に縦刷毛を行う。28は壺の口縁部である。口縁部内面に粘土帯を貼り付け肥厚させている。

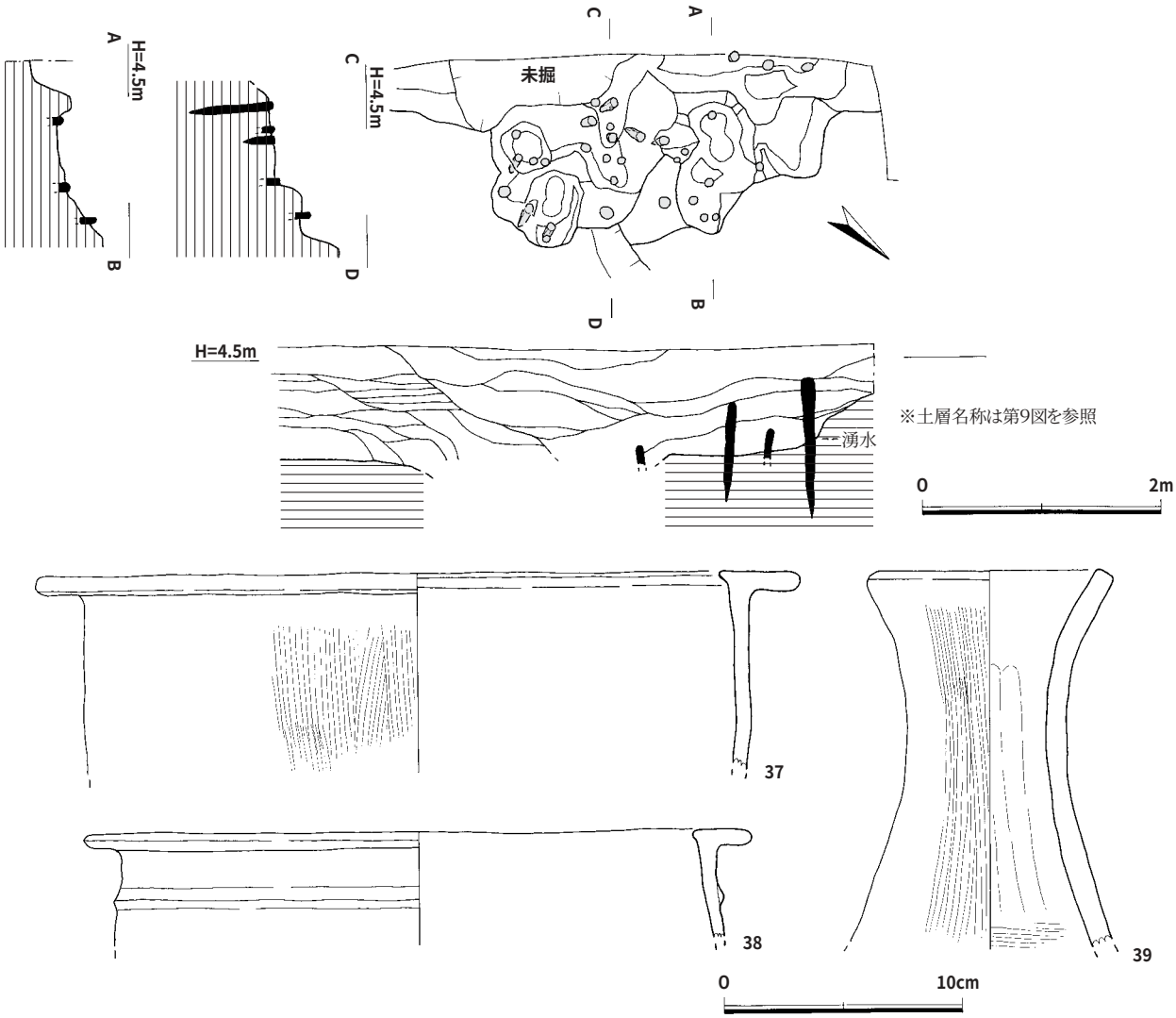


※作図位置については全体図を参照

1. 青灰色シルト（きめが細かい）＝第9図69層
2. 1層がやや暗くなり暗褐色化する＝第9図76層
3. 暗褐色シルト（土器を多く含む）＝第9図77層
4. 暗褐色包含層＝第14図A層
5. 暗黄褐色土
6. 5層がグライ化して青灰色化する＝第9図78層、第14図B層
7. 黒色土＝第9図79層、第14図D層



第12図　ＳＤ004東西土層及び出土遺物実測図（1/50、1/3）



第13図　ＳＸ005及び出土遺物実測図（1/60、1/3）

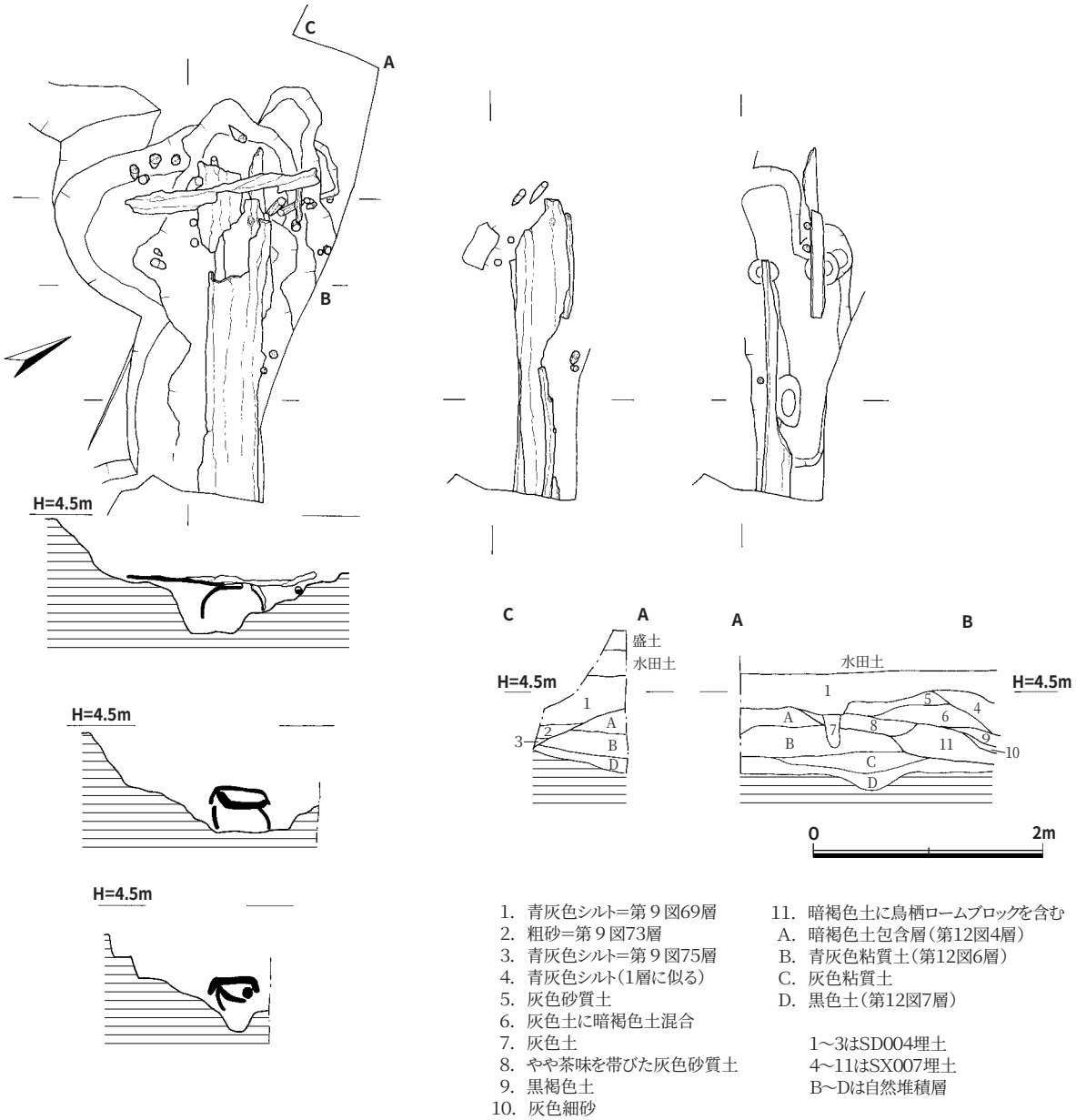
口縁部には上端及び下端部に刻みを行う。口縁部内面に横刷毛、外面には縦刷毛を施す。29・30は裾広がりの厚い上げ底底部である。外面に縦刷毛を行う。31～35は小型壺である。32には顔料が器面に僅かに残っている。ヘラ描きの羽状文・山形文を施文する。35は下半部破片である。底部には円盤貼り付けが行われている。36は石剣の一部であろうか。鎬の一部が残存している。

ＳＸ005（第13図）

西壁際で検出した杭群で、ＳＫ003及びＳＤ001を切る遺構である。全体を確認していないため形状は不明であるが、丘陵縁辺を不整形に掘り込んだ所に、縦杭を打ち込んでいる。現状では北東壁側を中心に打ち込んでいるように見える。掘り込み形状は不規則で、湧水により未掘の部分も残っている。横木等は認められない。また木質の遺存状況も丘陵側では特に不良である。時期は異なるがＳＸ007のような貯木状の遺構であろうか。弥生時代中期中頃に位置付けられる。

出土遺物（第13図）

37・38は鋤状口縁の甕である。口縁部上面は水平で、内側への張り出しは僅かである。内面は共にナデ調整。37は外面縦刷毛を行い、38には突帯を貼り付けている。39は器台である。外面縦刷毛を行



第14図　ＳＸ007実測図（1/60）

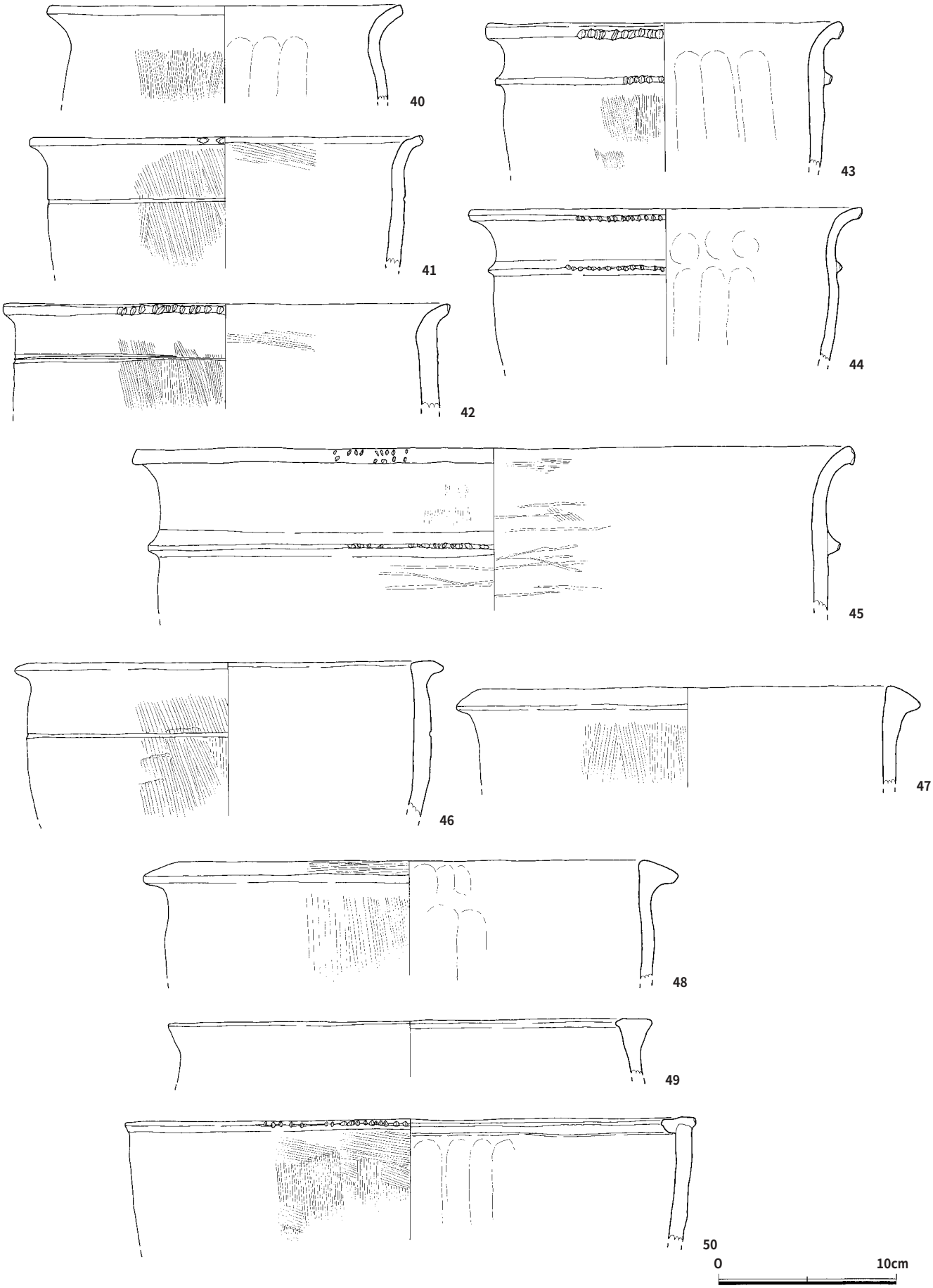
う。内面は下端部分に横刷毛を行うが、それ以外は縦方向の指ナデによる。

ＳＸ007（第14図）

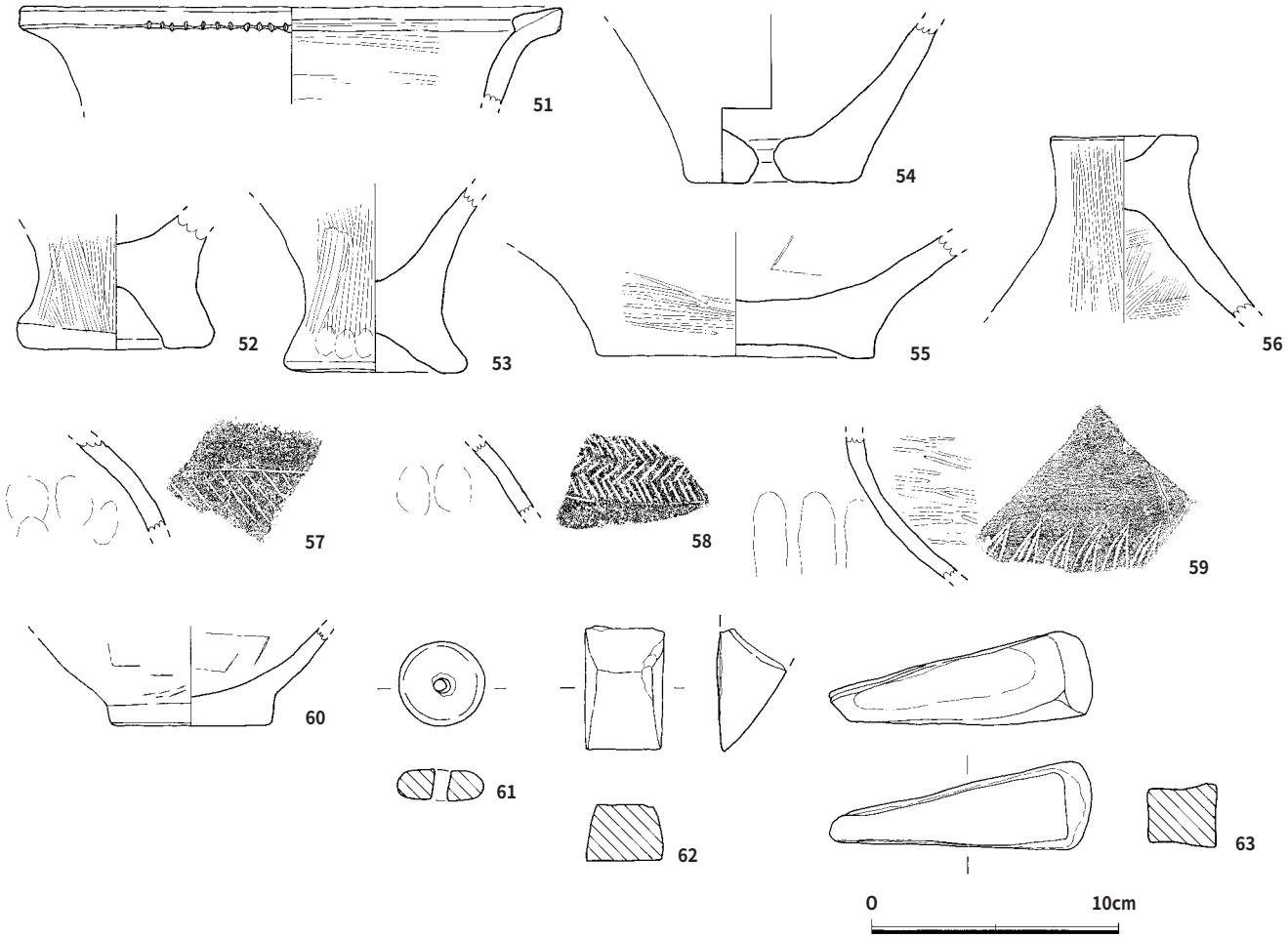
調査区西壁際で確認する。ＳＸ005同様丘陵斜面部分を不整形に掘り込んでいる。ここでは南側を中心に縦杭が多く打ち込まれ、この杭により長さ2.5ｍ以上の自然木を中心とした木材を固定しているようである。木材は内側が失われた状態で樋状の形態をしていたが、内外面に加工痕跡が見られないことから、自然腐敗によるものと判断した。なお内面側は炭化したような黒色部分が広く広がっていたが、原因は不明である。また木材が底面に接する部分では石材で固定したような箇所も認められている。遺構内埋土は大半が粗砂層であり、遺物も比較的多く出土している。土層からＳＤ004に先行するものと考えられる弥生時代前期末～中期初頭の貯木遺構であろう。

出土遺物（第15・16図）

40～45は如意形口縁の甕である。いずれも口縁部の屈曲は強く、41～44の口縁端面には刻み目がほ



第15図　ＳＸ007出土遺物実測図１（1/3）

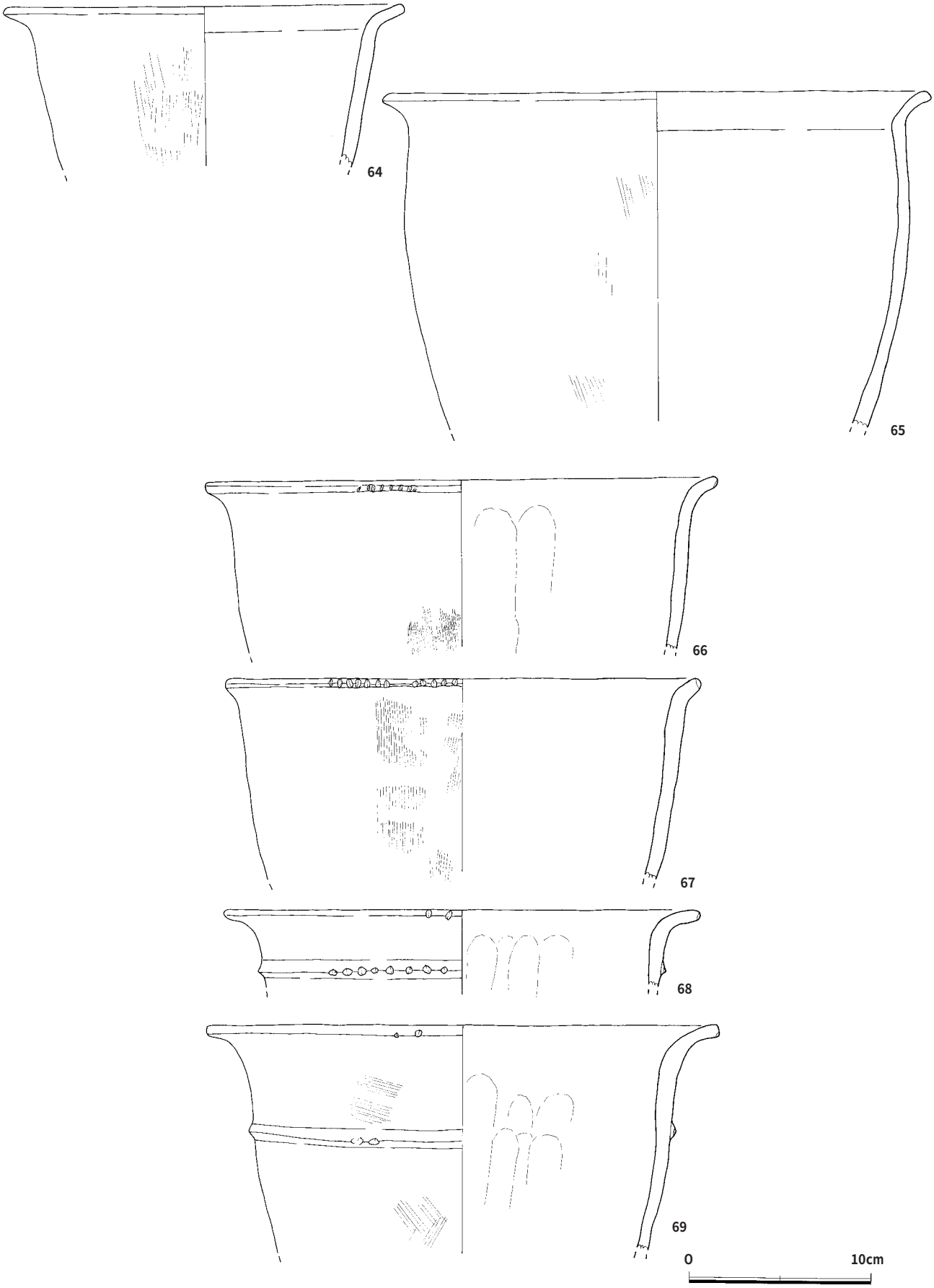


第16図　ＳＸ007出土遺物実測図２（1/3）

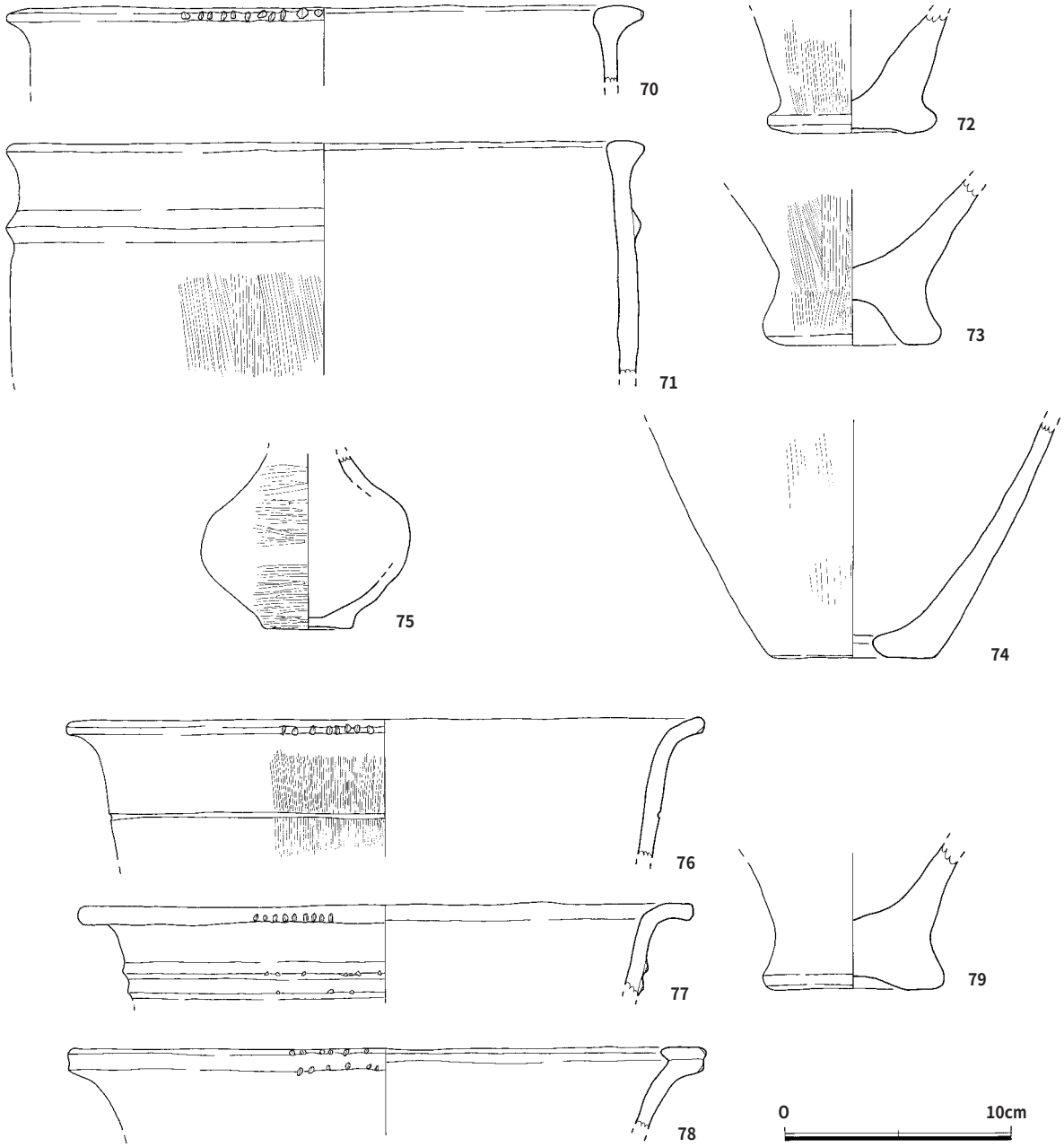
どこされている。また41・42には外面に沈線が施され、43～45には刻み目を有する突帯が貼り付けられている。調整は外面縦刷毛を基調とし、44・45はナデにより刷毛目の多くが掻き消されている。内面は口縁部が横刷毛もしくは横ナデにより、胴部は指ナデを行う。45は強いナデが行われ、部分的に研磨状となっている。46～49は口縁端部外面に粘土帯を貼り付け、口縁部断面三角形に作るものである。46～48の外面には縦刷毛が認められ、46は胴部に一条の沈線を有する。50は口縁端部上面から粘土帯を貼り付け、内外面に張り出す口縁部を作るものである。特に内面への突出が顕著である。また端部外面には刻み目が施される。調整は外面刷毛目、内面指ナデの後ヘラ状工具による斜方のナデを行う。51は口縁部内面端部に粘土帯を貼り付け、断面鋤状に作る壺である。下端部に刻みを施す。52～55は底部である。52・53は厚手で上げ底に作るものである。54は厚手平底の底部である。焼成後の穿孔が行われる。55は壺底部である。上げ底に作り、胴部外面には磨きが行われる。56は蓋である。57～60は小型壺である。57・58はヘラ描き、59は貝殻施文である。60は底部を円盤状に作る。61は土製紡錘車である。62は頁岩製の片刃石斧である。63は白色花崗岩質の石材を用いた砥石である。

５）包含層出土遺物（第17・18図）

包含層はＳＫ003東側の丘陵上で認められたもの（第８図１層）と、丘陵西側斜面上に堆積したもの（第12図４～７層）が確認できた。ここでは丘陵斜面上に堆積した包含層出土遺物について述べたい。ここでは遺物を比較的多く含む４層とその下層のほとんど遺物を含まない水成自然堆積層の５～７層に分けることができる。今回の調査では先行した第26次調査より更に低地部での調査となったた



第17図　包含層出土遺物実測図１（1/3）



第18図　包含層出土遺物実測図２（1/3）

め、前回調査程多くの遺物は出土していない。また遺物が多く出土する４層もＳＤ004によって削平されていたため、確認できた範囲も狭いものとなっている。ただＳＸ007土層（第14図Ａ層がこれに対応）からみると、この包含層の分布は更に西側に延びており、地山の傾斜状態が比較的緩やかなことを考えると丘陵斜面際から比較的離れたところまで包含層が形成されていた可能性が考えられる。第26次調査土層との対応関係で言えば、第14図４層が第26次調査 Fig 172の８層及びｄ・ｅ層に対応し、第14図５～７層が10・12層及びｆ・ｇ層に対応するものと考えられる。出土遺物は小破片が多く、層位による時期区分はできていない。出土遺物の多くは弥生時代前期後半～末を主体とし一部中期初頭～前半のものを含むようであり、第26次調査成果を追認するものである。

64～75は第12図４層出土、76～79は第12図５～７層対応土層出土遺物である。

64～69は屈曲の強くなった如意形口縁を有する甕である。66～69には端面に刻み目を有し、68・69の胴部には刻みを行う断面三角形の突帯を貼付する。調整は外面縦刷毛を主体とし、内面は指・ヘラナデを行っている。70・71は粘土帯貼り付けにより断面三角形の口縁部に作る甕である。70は口縁部外面に刻みを行う。71は胴部に三角形の突帯を貼り付け、突帯以下には縦刷毛が認められる。72・73は上げ底となる底部である。74は平底の底部で焼成後の穿孔が行われる。75は小型の壺である。底部は円盤状に作り、外面調整は磨きが施される。

76・77は如意形口縁の甕である。口縁部は強く屈曲し、端面には刻みが行われる。76は外面縦刷毛を行い、後に一条の沈線を施す。77は胴部に二条の刻みを有する三角形突帯を貼り付ける。78は壺の口縁部である。口縁部上面に粘土帯を貼り付け、断面鋤状口縁を作る。口縁上下両端面に刻みを施す。79は厚手の上げ底の底部である。外面はヘラ状工具によるナデを行う。

６）小結

今回の調査は比恵遺跡の北西側の丘陵縁辺部分に位置している。丘陵部分では第26次調査と同様の、竪穴住居跡、貯蔵穴、溜池状の大型土坑、溝等を検出した。また調査区北西隅には丘陵部分が西側に張り出していることも確認できた。丘陵緩斜面部には包含層が形成され、これを切る溝、杭群、貯木状遺構を検出している。出土遺物は弥生時代前期後半～中期初頭を中心とし、一部中期中頃までに位置付けられるものも見られる。

今回縁辺部分の地形復元及び該期集落様相を探る上で貴重な成果を上げることができた。また生産に関連すると考えられる溜池状遺構・溝・杭群の確認もできたが、これに伴う水田等の様相についてはいまだ不明瞭な点も多く、今後の調査の進展に期待したい。

写真１　ＳＤ001・ＳＫ003（東から）

写真２　丘陵部Ｆ区全景（南から）

写真３　ＳＣ012・ＳＵ011（東から）

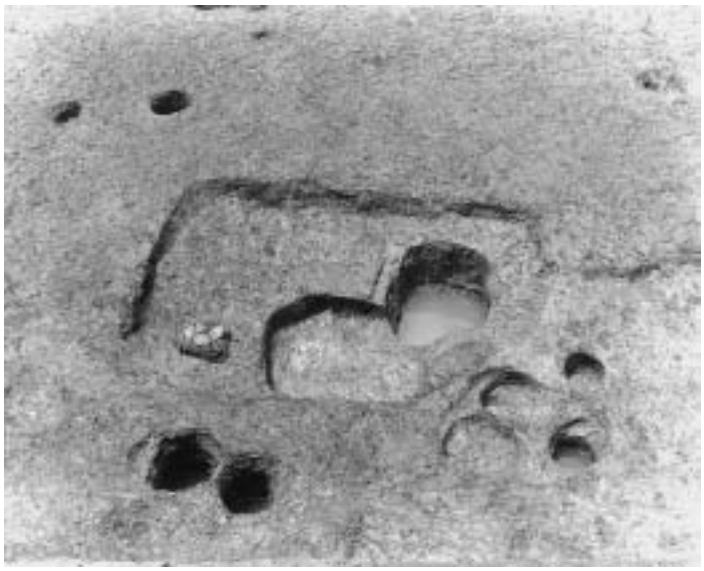


写真４　ＳＵ011（東から）

写真５　ＳＵ011内遺物出土状況（東から）

写真６　ＳＫ003（北から）

写真７　ＳＫ003（東から）

写真８　ＳＫ003北壁土層

写真９　調査区西壁土層（合成写真）

写真10　ＳＤ001北壁土層

写真11　ＳＤ001Ｂ区内杭列（東から）

写真12　ＳＤ001南端完掘状況（南東から）

写真13　ＳＤ001南端・ＳＸ005（東から）

写真14　ＳＤ004（北西から）

写真15　ＳＤ004及び包含層東西土層

写真16　ＳＸ005（西から）

写真17　ＳＸ005土層

写真18　ＳＸ007木材出土状況（北西から）

写真19　ＳＸ007木材出土状況（北東から）

写真20　ＳＸ007上部木材除去後（東から）

写真21　ＳＸ007土層

写真22　Ｄ区包含層除去後、丘陵傾斜状況（北西から）

写真23　Ｄ区包含層除去後（北から）

書名ふりがな　ひえさんじゅうく
書　名　比恵39
副書名　－比恵遺跡群第85次調査報告－
巻次
シリーズ名　福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号　856
編監者名　長家　伸
編集機関　福岡市教育委員会
発行機関　福岡市教育委員会
発行年月日　20050331
作成法人ID
郵便番号　810-8621
電話番号　092-711-4667
住所　福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名ふりがな　ひえいせきぐん
遺跡名　比恵遺跡群
所在地ふりがな　ふくおかしはかたくはかたえきみなみ３ちょうめ58ばん
遺跡所在地　福岡市博多区博多駅南３丁目　58番
市町村コード　40132
遺跡番号　37-0128
北緯　33°34′57″
東経　130°25′34″（世界測地系）
調査期間　20030604－20030731
調査面積　290
調査原因　共同住宅建設
種別　集落
主な時代　弥生
遺跡概要　弥生－竪穴住居跡１＋貯蔵穴１＋溜池（？）１＋溝及び関連遺構４＋包含層
中世以降－溝１
特記事項

福岡市埋蔵文化財調査報告書第856集

比　恵　39

－比恵遺跡群第85次調査報告－

2005年（平成17年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１

印　刷　有限会社浦永印刷
福岡市東区原田１丁目９－23